

五 流 (喜多流『湯谷』) 三番目物

作 者 不詳

典 拠 抛一平家物語

季・所 春平家全盛の頃・京都平宗盛邸・清水寺

登場人物 シテ一熊野 ツレ一侍女・朝顔

ワキ一平宗盛 ワキツレ一従者

あらすじ

平宗盛は、遠江の国池田の宿の遊女熊野を寵愛し、長く都に住まわせていました。ある日、国元より侍女の朝顔が訪れ、老母の病が重いことを伝えます。熊野は母の手紙を読み、暇を乞いますが許されず、かえって花見に連れ出されました。

東山への花見車、名所の桜の花盛りも、病母を憂えて熊野の心は沈みがちです。清水寺に着くと酒宴となりました。熊野は宗盛の望みで心ならずも舞を舞います。

折からの村雨に花の散るのを見て母の命を思い「いかにせんだの春も惜しけれど馴れしあづまの花や散るらむ」の一首を短冊にしたためます。さすがの宗盛も心動かされ、許された熊野は、宗盛に心を残しつつ故郷へ帰ります。

ひとこと

都の花にも宗盛心づくしの花見にも心晴れやらぬ熊野のかげりを前半とし、後半、暇乞いが許され、俄かに明るむ喜びと華やぎと。惜春の情緒に溢れた花の能は「春の曙のごとし」と讃えられ、秋の夕暮れにたとえられる『松風』と対句のような曲です。

古い書物に「衣装華やかに結構なるを着すべし」と、記されているように、熊野は華麗な装束に身を包み、豪華な花見車の美しさの中で、身の愁い、心の愁いとしての落花哀惜の情を見せるのです。

京の花の名所のかずかずに、散り易い花の命と母の命を重ねて、ものの華やぎと滅びの美しさを描き、逝く春、逝く命、ひいては平家の東の間の命を予感させるのでしよう。文の段、酒宴の舞、村雨に散る花、短冊の段、帰国の喜びと、王朝絵巻さながらの劇的展開です。

『平家物語』に取材した作品は、大きく分けて夢幻的な修羅能と現在の劇能に分類されます。

『熊野』は、平宗盛という実在の人物と、仕えていた熊野という遊女が舞台に現れて、花の都の一日の出来事を描き出した現在進行形のドラマです。つまり、歴史上の有名な実在の人物が現れ、シテとワキとして、お互いに葛藤しながら、いろいろの出来事を引き起こしてゆく、日常的な

人情劇として成り立っているのです。解りやすく親しみやすいので昔からひとびとに親しまれ、上演回数は、室町期の記録でも流行曲の王座を占めていました。

出典と熊野について

出典は、平家物語の「海道下り」の一章です。それによれば、一の谷の合戦で生け捕りになった宗盛の弟・重衡が鎌倉に護送される途中、天竜川西岸の池田の宿に宿泊します。重衡に同情した宿の長者(遊女宿の女主人)熊野の娘侍従が一首の歌を詠み、その奥ゆかしさに名を尋ねると、

「あれこそ屋島の大臣殿の当国の守にてわたらせ始ひしとき、召されまいらせて御最愛候ひしに、『老母のいたはり』とてしきりに暇申しけれども、賜はざりければ、ころは弥生のはじめにてもや候ひけん、
いかにせん都の春も惜しけれど慣れしあづまの花や
散るらむ

とつかまつりて、御暇賜はりてまかりくだり候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける。

遠江の国池田の宿の長・熊野という人の娘は海道一の有名な遊女で、名を侍従とよばれていました。平宗盛が、まだ遠江守であった頃、愛人となりましたが、宗盛の任果てのち、都に伴われた女であったと書かれています。

この侍従は、能では母の名を取り違えられたまま主人公に仕立て上げられ、熊野と呼ばれ曲名にもなりました。許されて池田の宿に帰った侍従は、その後池田の宿の長として母の後を継いだのでしょうか。

貴族に仕える遊女にとって和歌を詠むということは、必

須の教養でした。熊野は「いかにせん都の春も惜しけれど慣れしあづまの花や散るらむ」という名歌をもって、宗盛の心を動かす、帰郷を許され、そのエピソードによって「海道一の名人」と記されたのです。

宗盛について

宗盛は平清盛の次男で、兄の重盛が父に先立って死に(二七九)、その二年後治承五年清盛の死後、名実ともに平家一門の中心人物となりました。「平家物語」や「吾妻鏡」では、宗盛は、負け戦ばかり重ねる凡庸無能・卑怯未練のつまらぬ武将として冷淡に扱われています。

舞台にそつて

舞台が始まるとワキ宗盛が登場して、舞台中央でいきなり(これは平宗盛なり)と名乗ります。異色の登場です。史的宗盛像を排除して別の宗盛像を宣言し、権勢並びなき平家の嫡流としての闊達さと磊落さが、この貴公子にはあるのです。続いて熊野の素性と境遇を明らかにします。簡潔な舞台展開です。

ツレ朝顔が故郷の母の文を携えて登場し

「夢の間惜しき春なれや。咲く頃花を尋ねん。」

と母の命を暗示します。シテ熊野の登場歌は、

「草木は雨露の恵み。養ひ得ては花の父母たり。いはんや人間に於いてをや。あら御心もとなや

病母を思い、雨露に養われる草木や花を見ても心を痛める憂愁の情趣をしみじみと漂わせませす。

老母の病が重いことを知った熊野は、文を宗盛に見せて暇を乞おうとします。

「何と故郷の方よりの文と候や。さらば共に読み候へし宗盛が一緒に読もうと、共に読み始める手紙は、いわゆる「文之段」として聞かせどころの一つになっています。「伊勢物語」の「老いぬればさらぬ別れのありといえはいよいよ見まほしき君かな」を、巧みに引用して直接語るのではなく、手紙を読むことよって老母の病氣の様子と、熊野のしみじみとした感慨を知ることが出来る優れた演出です。

熊野には、宗盛のもとを離れたくないのに、故郷の母には会いたいという心理の二重性があります。宗盛の愛は権力者の一方的な愛ではなく、女の心を捉えている自信に裏付けされた、余裕のある愛情でした。熊野を手元に置いておこうとする強引さは、一面に於いて、愛情の表現であるように、熊野の一途な帰国の願いにも甘えがあるのです。

この微妙な心理的駆け引きは、花見車を境に舞台が大きく変わります。

「牛飼ひ車寄せよとて、牛飼ひ車寄せよとて
車出シのアシラヒという特殊な囃子が入って車の作り物が出されます。

宗盛には熊野に暇を与えたい気持ちはあるのですが、この春の花を熊野と共に見たいという気持はさらに強いものがあり、宗盛は熊野の願いを押し切ります。熊野は病母のもとへ帰りたいと願う心を抑えて、宗盛の命令に従って心ならずも花見車に乗るのです。

「名も清き、みずのまにまにとめ来れば、川は音羽の山

桜、東路とても東山、せめてそなたのなつかしや。
愁いに沈む熊野にさくらの景色は見えず、母の住む東の空を見て涙を抑えます。

一転して

「四条五条の橋の上。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣袖を連ねて行く末の。雲かと思えて八重一重。咲く九重の花盛り名に負ふ春の気色かな。

陽春の行楽に雑踏する駘蕩たる景色。

河原表から清水寺まで、八条の宗盛邸新幹線京都駅付近を出発し、車大路を通り、六波羅、愛宕の寺、六道の辻、鳥部山、経書堂、子安の塔、車宿り、馬留めを経て清水寺までの道行。「熊野」の花見は、京都周辺の名所を巡り、この長い名所巡りが能の中心と響きあって、女主人公の哀しみに色を添えます。

「熊野」が名曲といわれるのは、名所巡りが次第に曲の緊張感を高めてゆくところにあります。熊野の視線の美しさが彼女の置かれた複雑な立場を屈折させて、刻々と流れる時間の流れは、心の移り行きであり、咲き誇る桜にやがて散りゆくものを浮き彫りにするのです。

熊野の老母の思う心情を巧みに織り込み、古代中世の地名づくし、物づくしで、それぞれの土地や物の精霊を呼び集める咒詞でもありました。

清水寺に着き、車が引かれます。熊野は

「南無や大慈大悲の観世音母に逢わせて賜ひ給へ
観音堂に一人閉じ籠もり、母との再会を祈ります。

へなにとて御当座なども遊ばされ候はぬ

酒席に侍る熊野は、母のことを思うと同時に、花見の宴を司る女主人として即興の和歌を詠むことをけなげに勧めます。

へ花前に蝶舞ふ紛々たる雪、柳上に鶯飛ぶ片々たる金。
花は流水に随つて香の来ること疾し。鐘は寒雲を隔てて
声の到ること遅し。

酒宴は盛り上がり、熊野は桜の精のように晴れやかに朗詠します。一曲の中心的叙情です。

熊野は宗盛に酌をし、酌をした扇を開いたまま舞い始めます。突然の村雨によつて、無残に散りゆく花。熊野は、母の命を救うように花を掬い、花を扇に受け、涙を流すのでした。

へ山の名の。音羽嵐の花の雪、深き情を人や知る。

散り紛う落花の雪、深い悲しみと表裏一体となる「春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなれば」の古歌を想い起し、堰を切つたように

へいかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらむ
と自分の想いを短冊にしたためます。心を動かされた宗

盛は、熊野の帰国を許します。
観音信仰と、ふるさとへ帰るきつかけとなつた和歌の功德。

和歌説話、霊験説話、芸能説話を下敷きとして、遊女なればこそ、芸にも教養にも優れた当時の理想の女性としての姿が能に描きあげられていったのでしよう。

帰郷を許され、いそいそとへ東路さして行く道の の繰り返しが熊野の遠ざかり行く距離となり、

へ花を見捨つる雁の、それは越路、我はまた、東に帰る
名残かな。

宗盛に名残を惜しみつつ、華やぎのうちに一抹の寂寥感を漂わせ、春愁の能は終わります。

小書について

三段之舞 三段之舞について紀州徳川家の能役者徳田隣忠の「隣忠秘抄」に「古代は熊野は三段に極りたる由なり。心は宗盛に望まれ舞は舞へども老母の痛みは心に忘れず心進まず舞ふゆへ短く舞ふ心なり」とあります。

ワキに酌をした扇を開いたまま舞い始めます。カカリ初段を抜き、本来は五段の舞を三段に舞います。一刻も早く舞い上げたい心情からです。「舞金剛」といわれます。華麗でおらかな舞が拝見出来るでしょう。

短冊之留 金剛流のみの非常に珍しい演出で、本日の見どころです。シテが懐中から短冊を取り出し、和歌を書き始めます。ワキは墨つぎ二回で謡い出せるように立ってシテの横へ行き、中腰になりへいかにせん都の春もおしけれど」と上の句を謡い、シテが「馴れし東の花や散るらむ」と下の句を謡います。ワキは「げに道理なり哀れなり…」と謡い、地になつて、ワキは立ち、脇座に戻ります。演出は多様です。

作り物について

花見車 割り竹を使った作り物は、上半分に庇を模した裝飾があり窓もあります。半円形の屋根が紅色の布で覆われ、紅緞で巻いた竹細工の造型と組み合わされて、艶めかしく可憐な色めいた雰囲気が漂います。輪は、片方は十文字に、もう一方はハスになるように着けられ、車が動いているようにと、細やかな配慮です。

熊野の道行

- 馬 留 め 清水寺仁王門の左手にある
- 子 安 の 塔 家並みが途絶えた植え込みのなかに子安堂の跡の碑がある
- 車 宿 り 清水坂のみやげ物屋の間にある古いお堂の辺りにあったといわれる
- 経 書 堂 三年(産寧)坂と清水坂の交わる角にある
- 六道珍皇寺 ここにも「六道の碑」があり、門前の南の道が六道の辻といわれている
- 愛 宕 の 寺 六道の辻の北側にあったといわれる
- 六 道 の 辻 南西の西福寺の角に「六道の辻」の碑がある
- 念 仏 寺 松原警察署あたりが念仏寺跡
- 車 止 め 跡 川端通りを過ぎ、宮川町通りを少し下がった壽延寺は車止め跡といわれている
橋は車は通れず、車は川を渡って、人だけが輿で橋を渡った
- 五 条 橋 現在の松原橋あたり
- 平 宗 盛 館 現在のJR 京都駅高倉陸橋あたり

